

大津 歴博 だより

2000
No.40

開館10周年記念企画展 20世紀のおもちゃー北原照久コレクション

8月1日(火)～9月3日(日)



ジープ（戦後第1号型）小菅/昭和20年頃/個人蔵

第二次世界大戦で中断していたブリキ玩具の製造は、昭和20年（1945）12月に大津で製作された戦後第1号のブリキ玩具をきっかけに復興し、日本の子ども達だけでなく、輸出品として、世界の子どもの手に渡りました。その後、ブリキ玩具は昭和40年頃を境に、プラスチックやソフトビニール等の玩具に姿を変えてゆくこととなります。

本展覧会では、戦前から1970年代頃までを中心に、いまや世界的なおもちゃコレクターとして有名な、北原照久氏のコレクションを展示し、20世紀のおもちゃの変遷をたどるとともに、戦後大津のブリキ玩具製作の状況を物語る証言や作品などから、大津とブリキ玩具の関わりを紹介します。



大津市歴史博物館

戦後第一号の金属玩具は大津で作られた

第二次世界大戦後の食糧難の中、子ども達の心をとらえたのは、ブリキで作られたジープのおもちゃでした。昭和二〇年（一九四五）十二月、敗戦の四か月後に京都のデパートで売り出されたこのおもちゃは、爆発的な売れ行きをみせ、一説にはその年の暮れだけで十萬個が売れるほどだったといわれています。

このジープは、大津市内の石山・膳所近辺の工場で作られていました。材料は、当時大津に駐留していた占領軍から放出された空き缶が利用されました。これを製造したのは、戦時中に東京から疎開で大津にやってきていた「小菅松蔵」という人物です。小菅は、戦前から東京で玩具製作を行っていた玩具職人で、戦後東京に戻ってからも、数多くの優秀な玩具を作りました。戦後のブリキ玩具の復興は、この大津で製作された「小菅のジープ」がきっかけであったといわれており、戦後第一号の金属玩具として歴史にその名を刻んでいます。まさに、「戦後のブリキのおもちゃは大津から始まった」のです。



幸福時代（戦前のヒット作）クラモチ/昭和初期/北原照久氏蔵

今回は、展覧会の事前調査において発見された、戦後第一号の小菅のジープをはじめ、同時期に作られた小菅のジープのバリエーション、また小菅氏が帰京した後に製作した玩具の数々を展示します。



キャデラック（車のおもちゃの最高峰）マルサン・コスゲ/昭和30年代/北原照久氏蔵

20世紀のおもちゃ

展示会のまじりん

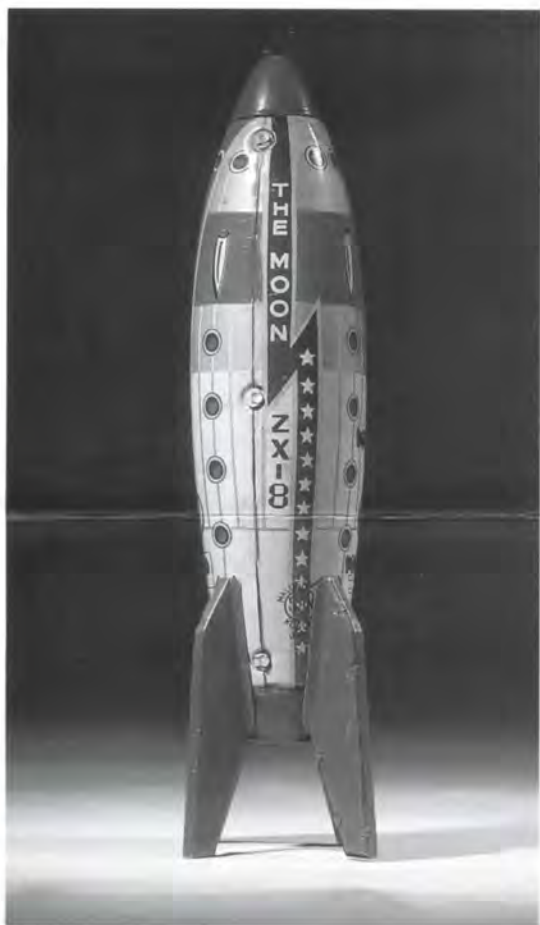
●戦前から一九七〇年代にかけての様々なおもちゃ、約一千点を展示します。

●展示は、ブリキ玩具を中心に年代順に展示。戦前のブリキ玩具やオキユバイド・ジヤパン（占領下で作られた玩具）など、貴重な作品も展示します。

●ブリキ玩具以外にも、ミッキーマウスなどのキャラクター玩具・ままごと道具などを展示、子ども時代に遊んだ玩具がきつと見つかります。

●大津で作られた戦後第一号の金属玩具や、これを製作した小菅松蔵の他の作品などを展示、大津のブリキ玩具の製作状況についても写真やパネルなどで解説します。

●展示室内には、復刻版のブリキ玩具を置き、直接手で触れられるコーナーを設置します。



ロケット（ザ・ムーン）
マルサン・コスゲ/昭和30年代/北原照久氏蔵



ロボタンク-Z
ノムラ/昭和30年代後半/北原照久氏蔵

北原照久氏について



一九四八年、東京生まれ。ブリキのおもちゃの第一人者として世界的に知られている。一九八六年、横浜山手に「ブリキのおもちゃ博物館」を開館、その後日本各地に博物館を展開。「開運なんでも鑑定団」をはじめ、TV、出版、講演など多方面で活躍中。著書には「ブリキのおもちゃ博物館」（マキノ出版）など多数。

大津の伝統行事 I

8月8日(火)～10月1日(日)

大津市内には、四季を通じてさまざまな伝統行事が伝えられています。日吉大社の山王祭や大津祭など、著名で大規模な行事がある一方で、各地域の歴史を反映した、素材で内容豊かな行事も多数伝えられてきました。ミニ企画展では、そうした市内の伝統行事を少しずつ紹介していきたいと思っています。

今回は、市内の正月行事のうち、勧請縄と呼ばれる行事を中心に紹介します。

勧請縄は、正月のある決められた日、集落の入口や神社の境内に張り渡される、特別なしめ縄です。新しい年を迎え、外から災いがやってこないように、集落の入口にこのようなしめ縄を張り渡したといわれています。集落の境は、特別な場所と認識されており、全国的には、大きな草鞋や人形を飾り、外から悪霊を防ぐ行事が見られますが、滋賀県周辺では、勧請縄がよく見られる呪物です。

市内では、南部の田上学区・大石学区や瀬田学区、真野学区の神社に見られます。今回、北大路一丁目の御霊神社の氏子さんのご協力により、正月九日の神縄祭の勧請縄をご寄贈いただきました。

勧請縄の特徴は、太い左ないのしめ縄に、ハナ(小勧請)と呼ばれるものを、平年は十二本、閏年は十三本垂らすのが特徴です。北大路のものは、中央をより太く作り、ハナにもカイバの板を挟んだりして、他の勧請縄に見られない特徴があります。

行事は、当番宅で整えられた勧請縄を、神社の境内と、集落の外れに張り渡すものです。勧請縄行事は、かつて多くの場所でも見られたよう、古文書に「かんじよう縄」の文字を認めることができます。ミニ企画展では、こうした古文書も合わせて紹介します。

また、現在は見られませんが、伊香立学区に田遊びが行われていました。神社の前で豊稔を願って、田仕事の所作を行うもので、この時の歌詞(詞章)を記した古文書が残されています。大正時代に止んでしまった行事の片鱗を伝える、貴重な資料です。



北大路勧請縄の中央部分

大津市歴史博物館・
高岡市万葉歴史館交流展

「越中万葉の世界」

〔会期〕 7月29日(土)～8月13日(日)

〔会場〕 企画展示室B

〔休館日〕 7月31日、8月7日

当館では、他地域の博物館・美術館との交流を積極的に進めており、今回、その一環として、高岡市万葉歴史館の展示会を開催いたします。高岡市万葉歴史館は万葉故地交流事業として、毎年「越中万葉の世界」展を、万葉に関わり深い地で開催しており、今回は大津の地で開催することになりました。

富山県高岡市はかつて越中国府が置かれた地で、大伴家持が国守として赴任したところとしてよく知られています。「万葉集」には、家持が国守在任期間(六年)に、自ら詠んだ歌約三二〇首をはじめ、越中に関わる歌三二〇首余りが掲載されており、これらの歌群は「越中万葉」と呼ばれています。

今回は、万葉集の断簡や古写本、近・現代作家の万葉を題材にした作品などを展示し、「越中万葉の世界」を紹介いたします。なお、観覧料は無料です。

当館では、これからも、他館との交流事業を企画していきたいと考えております。

◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇ 歴史博物館講座ご案内 ◇◇◇◇◇◇◇◇◇◇

平成12年8月から9月まで

8月13日(日) 13:30~15:00	企画展記念講演会	ブリキのおもちゃの魅力
<p>○ブリキのおもちゃコレクターとして世界にその名を知られる北原照久氏に、ブリキのおもちゃのもつ魅力を、存分にお話しいただきます。</p> <p style="text-align: right;">講師：北原 照久（ブリキのおもちゃ博物館館長）</p>		
8月26日(土) 13:30~15:00	企画展関連講座	ブリキ玩具と大津
<p>○戦後第1号のブリキのおもちゃを製作した小菅松蔵の生涯を、ブリキ玩具の歴史と対比させながら解説いたします。</p> <p style="text-align: right;">講師：木津 勝（本館学芸員）</p>		
9月2日(土) 13:30~15:00	ミニ企画展関連講座	近江の民俗文化
<p>○滋賀の民俗について、長年にわたりフィールドワークを積み重ねてきた第一人者に、近江の民俗文化を解説していただきます。</p> <p style="text-align: right;">講師：菅沼晃次郎（滋賀民俗学会会長）</p>		
9月9日(土) 10:00~11:30	第76回親子歴史講座	オカリナの演奏会
<p>○オカリナ作家の制作による、 TENTウ虫、フタ、ふくろう、パンなどの姿をした、オリジナルティあふれるオカリナで、音色の奏で方を楽しく学びます。</p> <p style="text-align: right;">講師：土田 隆生（京都女子大学教授）</p>		
9月23日(土) 13:30~15:00	ミニ企画展関連講座	大津の正月行事①—田遊び—
<p>○伊香立学区で大正時代まで行われていた「田遊び」を、現在残されている資料から紹介します。</p> <p style="text-align: right;">講師：和田 光生（本館学芸員）</p>		
9月30日(土) 13:30~15:00	ミニ企画展関連講座	大津の正月行事②—村境の伝統行事—
<p>○村境や神社で、正月の決まった日、勸請縄と呼ばれる特別なしめ縄を張り渡す行事が行われています。滋賀県内の様々な勸請縄を紹介します。</p> <p style="text-align: right;">講師：和田 光生（本館学芸員）</p>		

※諸般の事情により、内容が変更される場合があります。

※いずれの講座もハガキで、お申込みください。

※参加証の発送は、講座申込み締切り（10日前）以降となります。

受講の可否については、お知らせいたしますので、通知がない場合は、恐れ入りますが、博物館までお問い合わせください。

収蔵品紹介

34

天保九如図 鳥羽石隠 一幅

大津ゆかりの文人画家といえば、紀樞亭（きぼ）
いてい（一七三四～一八一〇）や横井金谷（よこい
きんこく（一七六一～一八三二）の名が思い浮か
ぶ方も少なくないと思います。地元では馴染みの
深い二人の影に隠れてしまっていますが、彼ら以
上に同時代の文化人の中心人物として活躍した画
家があります。その人物は、鳥羽石隠（一七三九～
一八二三）。名は希聰、字を叡父、通称を万七郎
といい、比叡山麓での出生にちなみ、石隠のほか
台麓とも号しています。一八世紀後半の京都は、
文人輩出の黄金期であり、石隠はその中であって、

池大雅、韓天寿、高芙蓉などといった当時の書画
の第一人者たちと親しく交流を重ねました。木村
兼葭堂や高芙蓉とともに補訂再版した『元明画人
考』（彭城百川著）や、京都の著名文化人所蔵の
硯を紹介した『和漢硯譜』等の出版活動はその良
い例です。京都の帰命院（仏光寺大宮西入ル）に
現存する墓碑銘によると、彼の人格は、その華や
かな人脈にもかかわらず、迷いがなく、常に私情
を捨てて自らの責を負っていた高潔な人物である
ことが記されています。ちなみに、彼の作風は、
非常に感覚的で、描写には、自由に屈託のなさが

感じられます。そのためか、海外で評
価され、米国には力作が渡っています。
どのような影響によって、このような無
手勝流の作風に至ったのか、確かな手
掛かりはつかめていません。朝鮮の絵
画にもやや共通した感覚の作品があり
ます。

なお、天保九如図とは、祥瑞を集め
た理想の山水を描いたものであり、『詩
経』巻四を出典としています。

（横谷 賢一郎）



文政3年（1820） 107.8×36.2 個人蔵

大津歴博だより No.40

平成12年7月19日

大津市歴史博物館

〒520-0037 大津市御陵町2-2 ☎ (077) 521-2100